

シリーズ◎患者の声を聴き、診療を見直そう

インタビュー◎LVAD装着患者のナラティブに学ぶ《2》

「やっとVADが外れる」、歓喜と安堵の移植前夜

2023/05/10

聞き手：今満 仁美＝日経メディカル

重症心不全患者に用いられ、心臓のポンプ機能を代行する**植え込み型左室補助人工心臓（LVAD）**。心臓移植へのブリッジや、移植適応外の患者の長期在宅治療（DT；destination therapy）を目的とした植え込みが認められている。LVAD治療が重症心不全の治療選択肢として広まろうとしている今、LVAD装着患者とその介護者の思いにも目を向けたい。64歳でLVADを植え込み、6年後の70歳で心臓移植を受けた川崎力男さん（72歳）、妻の泰子さん（71歳）に、移植までの道のり、LVADを装着していた待機中の生活について話を聞いた（文中敬称略）。

——LVADを装着するまでの経緯を教えてください。

力男 60歳を過ぎてから、それまで健康だと思っていた心臓が少しずつ不調を来してきました。64歳の夏、最寄り駅から自宅までの徒歩5分程度の距離も歩けなくなり緊急入院しました。治療を続けましたが芳しくなく、医師から「特発性拡張型心筋症です。半年後に生きている確率は2〜3割です。もう病院から出られることはないでしょう」と告げられました。とても悔しかったです。

妻は毎日見舞いに来て私を励ましながら、良い治療法がないか一生懸命に調べてくれました。そして、「LVADを着ければもっと生きられるかもしれない。心臓移植の機会にも恵まれるかもしれない」と言い、すぐに医師に掛け合ってくれました。当時、LVADの植え込み術を受けられたのは65歳未満のみ（編集部注：当時はDTの保険収載前で、心臓移植へのブリッジ目的でしか植え込みが認められていなかった）。私には3カ月ほどしか残されていませんでした。

当初、高齢の私にはLVAD装着・心臓移植の話はありませんでしたが、話が決まるや否や、植え込みに向けた検査や移植希望登録を迅速に進めてくださったので、とても感謝しています。せわしなく動いてくれた医療者の方々、家族を見ていると、一度終わりがけた人生がまた進み出したようでうれしかったです。検査の結果、幸い心臓移植の適応があったため、LVADを装着できることになりました。

——泰子さんのご尽力あつてのLVAD装着だったんですね。移植待機中、LVAD装着患者は24時間の介護が必要となります。介護者だった泰子さんはこの点をどのように受け止めましたか。

泰子 LVADの植え込みに当たり、家族が病院に集められ、24時間の介護が必要になること、LVADの知識や操作を身に付けなくてはならないことなどの説明を受けました。その上で、医師から「どうされますか。覚悟はありますか」と聞かれたのです。家族全員、「植え込みをお願いします。うちは仲良しなので心配いりません」と答えました。迷いはありませんでした。

その後、私、息子、夫の妹の3人が介護者になりました。LVADの知識や操作、ドライブライン（編集部注：体内に埋め込んだポンプと体外の装置をつなぐ部品）皮膚貫通部の消毒方法、シャワー浴の方法などを学び、夫の退院前に筆記試験で満点を取らなくてはなりません。必死に勉強して、私たち介護者はなんとか1回で合格できました。一方、術後のままならない状態で勉強していた夫は、3回目の試験でようやく満点を取ることができました。

LVADの装着に伴う感染症で、入退院を繰り返す日々

——LVADを着けての生活はどのようなものでしたか。

力男 年に3回ほど入院していました。心臓移植までの6年間、病棟で過ごしたのは通算600日にも上ります。定期的な診察で感染が見つかり、即入院というパターンがほとんどでした。私はそのまま入院して待つ身だからよいですが、付き添いの妻はすぐに帰宅し、LVADのバッテリーやケーブルなど10kgほどある機材を持って病院へとんぼ返りです。入院のたびに何度も何度も重い荷物を運んでくれた妻には、大変な苦勞をかけたと思います。

治療では、ドライブラインに沿って感染が進んでいくため、感染した部位を切り取り、止血のために電気メスで焼きつけます。麻酔の効きが悪いときは非常に痛かったのを覚えています。

LVADを着けていると、機材や傷口がぬれないように気を付けなければなりません。そのため、シャワーを浴びるのに手間がかかり面倒でした。また、外出時には行きかう人や後ろから飛び出してくる自転車にドライブラインを引っ掛けられないか、気が気でありませんでした。

泰子 介護者は3人いましたが、同居している私がメインとなって、退院後の夫を24時間サポートしました。「ずっと付きっきりでつらくないか」と聞かれることがありました。術前の夫は仕事で忙しかったので、逆に一緒に時間を過ごせることがうれしかったです。

一方、LVADが正常に動いているか、アラームを発していないか、常に気を配る必要があったため、慣れるまではよく眠れず、疲労がたまっていたのも事実です。

——感染症で入退院を繰り返したり、日常生活に制限があったり、気の休まらない日々を過ごされていたんですね。

力男 待機していた6年間、いつ移植を受けられるのかと毎日やきもきしていました。国内では70歳以上で心臓移植を受けた人はいないと知って落ち込んだりもしましたが、前向きに過ごしていれば必ず幸運が舞い込んできると自分に言い聞かせて乗り越えました。自分から積極的に今の生活を楽しまなければと思い、妻に同行してもらってゴルフに出掛けたりしました。また、私が使っていたLVADのバッグは身に着けていると右肩が凝ってしまうので、型紙を自作して革職人さんに専用のリュックを作ってもらい、これを受用していました。

「やっとLVADが外れる——」

——移植の順番が回ってきたときはどのようなお気持ちでしたか。

力男 一昨年の年末、22時頃に、移植の順番が回ってきたと電話がありました。「あなたより年上のドナーさんの心臓です。他のレシピエントさんは遠慮されています。移植を受けられますか」と言われました。断る理由などありませんでした。「やっとLVADが外れる」と、喜びをかみしめました。

翌々日の午前3時に移植を受けました。術前は多少の不安がありましたが、担当医師に「非常に相性が良い心臓です。よかったですね」と言ってもらえて、ホッとしました。ドナーの方には大変感謝しています。

——移植を終えた今は？

力男 自分の運の良さを実感しつつ、毎日ウォーキングしたり、毎週ゴルフに出掛けたり、夢のような日々を過ごしています。体に何も付いていないということが本当にうれしいのです。気兼ねなくシャワーを浴びられます。禁止されていた車の運転も再開でき、どこへでも行けます。今は人生2度目の青春です。

泰子 孫が家に遊びに来ると、夫と孫は一緒にお風呂に入り、いつまでも浴室ではしゃいでいるのです。「早く出てきなさい」と言いたくなりますが、待機中の時間を取り戻しているのだと思って、そっと見守っています。



70歳という国内最高齢で心臓移植を受けた川崎力男さん（左）、妻の泰子さん（右）